

共に楽しむとらうこ

永田 陽子

四歳の十月。友だちと一緒に遊ぶ楽しさを味わい始めた子どもたち。登園するなり「先生、

〇〇へ行ってくるね」と、五、六人の仲間が部屋から飛び出していく。

「〇〇ちゃんが私のこと入れてくれないの」と悲しそうな顔をして戻ってきたり、ある時は、

「私たち〇〇しているの。見に来て」と声をはずませて呼びに来ることもしばしばである。

四月当初は、私の膝元から離れられなくとも一緒にいた子どもたちが、友だちの中で生き生きと動いている姿を見ると、ほっとすると共にたのもしくもある。子どもたちがどんなこ

とをするのかなと、毎日楽しい日々である。そんなある日、子どもの一言で自分の保育の振り返りをせまられた出来事があった。

先生も楽しまなくっちゃ

「おばけ屋敷をしているから見に来て」と、呼びに来たので遊戯室へ行ってみると、遊戯室は黒幕が閉められ真暗。子どもたちは年長の何人かの女の子たちと一緒におばけになり、お互いにおどかしあっている。そこに他のクラスや年少組の子どもたちや保育者が加わり満員。入口ではY子が「いらっしやい。こわくないですよ」と案内をしている。あまりに盛り上がり過ぎている様子には私は安心し、「おもしろそう。また来るね」と言い、戻ろうとすると、Y子は「先生も楽しまなくっちゃ」とにこにこしながら言った。私ははっとし、あわてて「そう、そ

う、おもしろそうだから、先生も楽しんじゃおう」と中にはいってみた。すると、それぞれの子どもが私に向かって表情やからだの動きや声色を変えたりして飛びついてきた。私も一緒に驚かしたり、驚かされたりしながら、キヤーカーと声を出しながらスリルを楽しんだ。遊戯室の中央には何やらおばけの効果音のカセットテープも回っていた。「また明日、続きをしようね」で終わった。しかし、次の日は続きは始まらなかった。

思い返してみると、「先生、おばけ屋敷しているから見に来て」と呼ばれたのに、何故、加わろうとしなかったのか、自分でも不思議である。今のクラスの状態が、保育者と子どもの関係から子ども同士の関係へと広がりつつある時だと感じている。だから、なるべく遠目でみて

いようと思っていたこともあるが、私はつい遊びが盛り上がっていると安心してしまふところがある。また、遊戯室でおぼけ屋敷の遊びが盛り上がっているということを、他の子どもたちにも教えてあげなければと思っていたような気がする。もし、遊びが盛り上がっていなかったなら、一緒に加わり何とか楽しく出来るような援助をしたらう。

おぼけ屋敷の中に入り込んで、子どもたちと一緒にその場に浸ってみると、実にさまざまなが感じられる。子どもたちにとってこの暗やみはどんな意味があるのだろうか。何故、今のこの時期におぼけ屋敷をこんなに楽しんでいるのだろうか。

先日、年長組と一緒に近くの小石川植物園に園外保育に出掛けた。二、三日前に年長組から自分たちで決めたそれぞれのパートナーにお誘

いのお手紙が届いていた。当日は秋の自然の中で走りまわったり、木の実を集めたりして楽しい一日を過ごすことができた。その後、園生活の中でも年齢やクラスの枠を越えて、誘い合っで一緒に遊ぶ姿が見られるが、まだまだ緊張の伴ったものである。目的も明確でなく、ただ群れて遊ぶ楽しさの経験。これは園という日常的な環境から放れて成立した楽しさであった。園に戻っても、誰々ちゃんと遊びたいとか、〇〇して遊びたいといった明確な意図をもつものではなく、みんながワイワイと楽しむ、その集団

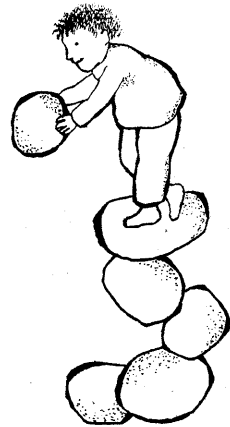


的な雰囲気味わいたかったの
だろう。その場合、カーテンで
しきる、暗くするといった環境
の設定が重要な意味をもってい
たのではないかと考えられる。

そう言えば、私もまだ関係の浅
い他のクラスの子どもたちとお

ばけ屋敷の遊びの後、何となく親しみを増した
関係になったことは不思議である。そして、次
の日に続きをしなかつた子どもたちの姿も納得
出来るし、ていねいに見てみると年長組とのか
わり方も違ってきたような気がする。いつも
おとなしい子どもも暗やみの中では、からだ全
体をつかって生き生きと表現しおぼけになり
切っていた。

暗やみの中でからだがふれ合った自由な体験
が次の遊びや人とのかかわりに変化をもたらす



のだろう。最近、クラスで読んだ『おしいれの
ぼうけん』の絵本をみんな大好きになり、何度
も読んだことも関係があるのだろうか。暗やみ
へのあこがれをクラスの子どもたちが持ってい
たことは確かであった。

子どもたちが自ら遊びを創造していく力を保
育者がどのように受けとめ、明日の保育に生か
していくのか、遊びの中に入り込み私も一緒に
楽しみなながら、一人ひとりの子どもの遊びの充

実を探り、共に体感することによって、始めて確かな幼児理解や適切な援助が生まれてくるのである。保育者が、集団が育って欲しい、子ども同士で何とかして欲しいという願いを持っているからといって、遠目で見ているだけであつたなら、それは放任保育であり、個々の子どもの育ちや集団がどんな風に育っているのかを捉えることは出来ない。

「先生も楽しまなくっちゃ」の一言が、このおぼけ屋敷の遊びにどうかかわるかということだけでなく、子どもたちが織りなす遊びを具体的にどう捉えたらいいのか、援助の方向性が見えてきたような気がする。最近、「共に生活する」

・「共にする」ということがよく言われる。

楽しみを共有しながら保育者が子どもとかわっている、その動作が子どもたちの中に伝

わっていくものがあるのだろう。保育者が自ら遊びを楽しむこと。つまり保育者として役割意識を離れ、まずは「共にいる」こと。大人として子どもの中にいることの意味・役割を改めて考えさせてくれた。

とはいえ、子どもに「先生も楽しまなくっちゃ」と言わせてしまった私。子どもにとっては、共に楽しむ相手ではなく、先生という存在に映っているのだと改めて反省した。

「先生も楽しまなくっちゃ」の一言が、これからの私の保育に大きな示唆を与えてくれた。そんな子どもたちに感謝の気持ちしきりである。

(日本女子大学附属豊明幼稚園)